News! the 世界遺産

王維坤さん講演会で、文化財保護について市民と意見交換

２月９日、鎌倉市役所で「王維坤さん講演会」が開かれ、基調講演のあと、参加市民との間で意見交換が行われました。王さんは 1952 年生まれ。西安の西北大学国際文化交流学院教授・副院長。文学博士（同志社大学）。2004 年、唐代の日本人留学生、井真成の墓誌を調査した考古学者で、中国イコモスの重鎮です。昨年春まで国際日本文化研究センター（京都）に所属し、高松塚古墳の研究や、文化財保存についての講演など精力的に活動してきました。一昨年鎌倉の史跡を見学。来日を機に、鎌倉市民と語り合いたいという申し入れが、王さんからあり、この講演会が実現しました。

〈講演要旨〉

皆さまにお会いできて非常にうれしく思います。鎌倉市民の皆さんが努力すれば、世界遺産になる可能性は高いと信じます。

本日、私は文化財に関して、四つの問題を話したいと思います。

第一は、文物（文化財）保護と世界遺産登録の関係です。文物は保護すれば長命です。世界遺産登録は文物保護に有利だと思います。価値のある遺跡を世界遺産に登録するのは私たちの共同責任です。鎌倉の大仏は世界遺産にすべきです。中国の世界遺産は日本に比べて少なく、西安では始皇帝陵しかありません。例えば唐時代の大雁塔・小雁塔などの遺跡はまだ登録されていません。それは私たちが申請をしなかったからです。

2007 年、高松塚古墳の石室解体という事態に遭遇しました。石室解体後、壁画や石室をどれだけ正確に復元できるか、見通しも立たない状態です。考古学者の一員として文物保護の重要性を痛感します。鎌倉の大仏はそのままだと風雨・雷及び湿度などでかなりの影響が予想されますので、どのように保護すべきか考えなければなりません。

第二は、現地保護と保蔵庫保護との関係です。古墳を発掘するといろいろな文物が出土しますが、特に壁画は永遠に変わらないのは不可能だと思います。高松塚の写真を御覧ください（発掘当時と 2007 年の映像をスクリーンで比較）。心が非常に痛みます。文化庁の石室解体の決定には賛成できます。しかし少し遅かったと思います。中国では「羊を失ってから、檻を修理する」という諺があります。

高松塚の壁画の年代と発掘の時期はほぼ同じですが、中国の章懐太子墓出土の壁画の方がよく保護されています（映像を表示）。直後に剥ぎ取られて保蔵庫に保存されているからです。

第三は、考古発掘と文物保護との関係です。考古学の発掘とは、発掘が目的ではなく、文物を保護するために行うことです。60 年代末期、陝西省文化機関が政府へ「乾陵発掘計画方案」を申請しましたが、周恩来首相に「我々が好いことを全部やる必要はありません。これを後代の人に残し発掘せよ」と指示され、中止になりました。唐代の皇帝陵は「関中唐十八陵」と呼ばれています。規模はきわめて大きい。乾陵はこれまで何度か調査されてきましたが、大きいばかりでなく、墓門をふさぐ石板の間に鉄を鋳込んだ堅牢な造りで、未盗掘の可能性が大きいと思われます。始皇帝陵を含む大きな陵墓の発掘では、考古発掘と文物保護との問題をどのように解決するかが何より重要であり、これが現時点での発掘に反対する理由です。

第四は、文物利用と科学研究の関係です。高松塚古墳解体後、どのように保護していくか大きな課題です。発見から 37 年を経た今でも、不明な点が残されています。被葬者、絵画技法、制作時期、壁画の源流および海獣葡萄鏡などの研究を一層進めていくことが重要です。例えば被葬者についても三つの学説があり、細かく分類すれば六つ以上になります。草壁皇子・高市皇子・弓削皇子などの天武天皇の皇子説、石上麻呂説の臣下説、そして朝鮮半島系王族説などです。私が一番気にしているのは、海獣葡萄鏡です。この鏡は唐の独孤思貞墓出土の鏡とてもよく似ており、この鏡の年代が分かれば、高松塚古墳の年代がある程度推測できます。私は海獣葡萄鏡と遣唐使を手がかりに検討したいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。